

他の部位との関係は不明で論じられない。

第2節 埴輪から見た菅沢2号墳の築造年代

菅沢2号墳の出土遺物の内、古墳の築造年代を検討しうる遺物は埴輪しか存在しない。須恵器・土師器もわずかに出土しているが、いずれも細片で時期を確定し難いうえ、出土状況も明確ではない。ここでは、埴輪の内容の検討から菅沢2号墳の築造年代を考えたい。

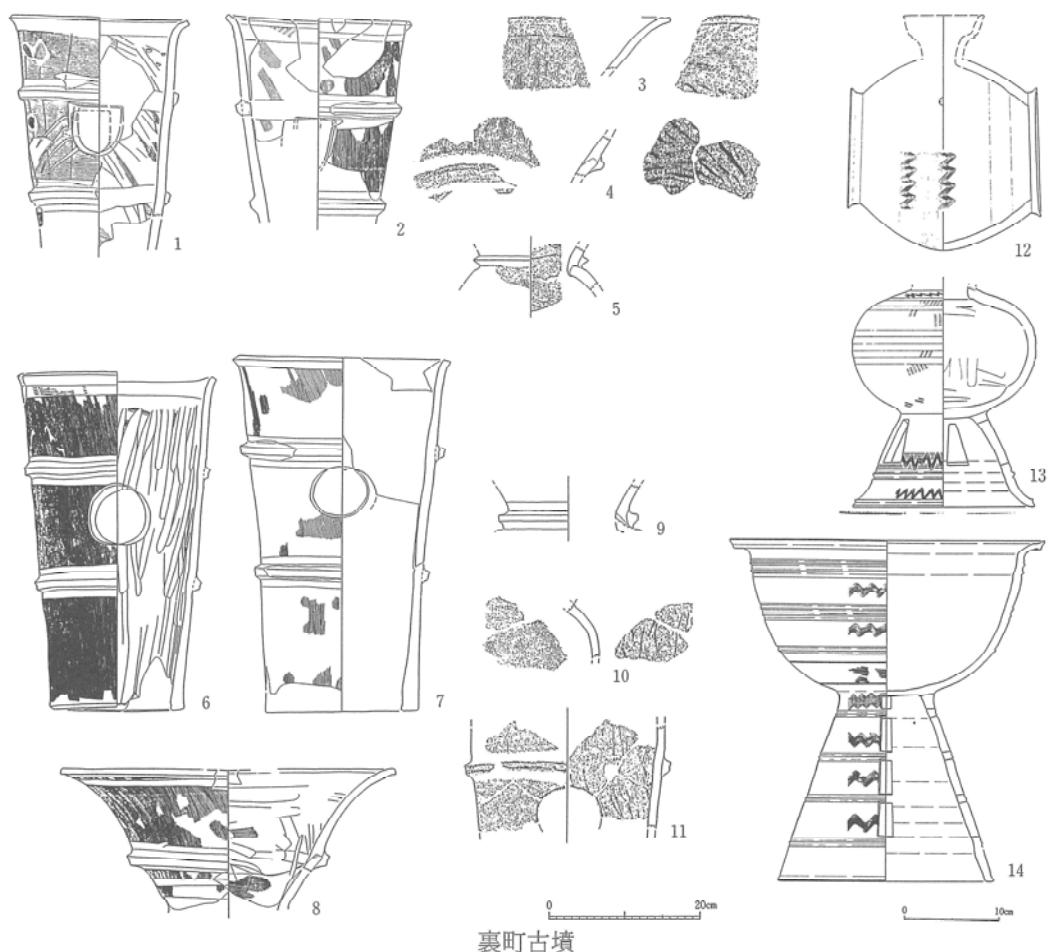
近年、円筒埴輪の編年研究は各地で盛んであるが、早くに轟俊二郎氏が指摘したように（轟俊二郎：1973）、埴輪の詳細な編年にあたっては、その系統関係を識別していくことが必要であると考えられる（結城慎一・藤沢敦：1987）。その際、本古墳出土埴輪と類似し、系統関係が追求できるような埴輪が近隣地域に存在すれば、それらとの比較を行うべきである。しかし次節で詳しく検討するように、菅沢2号墳出土埴輪に類似する埴輪は、今のところ東北地方には知られていない。したがって、全国的な埴輪の変遷観に照らして、本古墳出土埴輪の年代を限定していく方法を取ることにする。

菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪の特徴の内、年代を考える上で問題となる点を抜き出せば、以下の諸点があげられる。

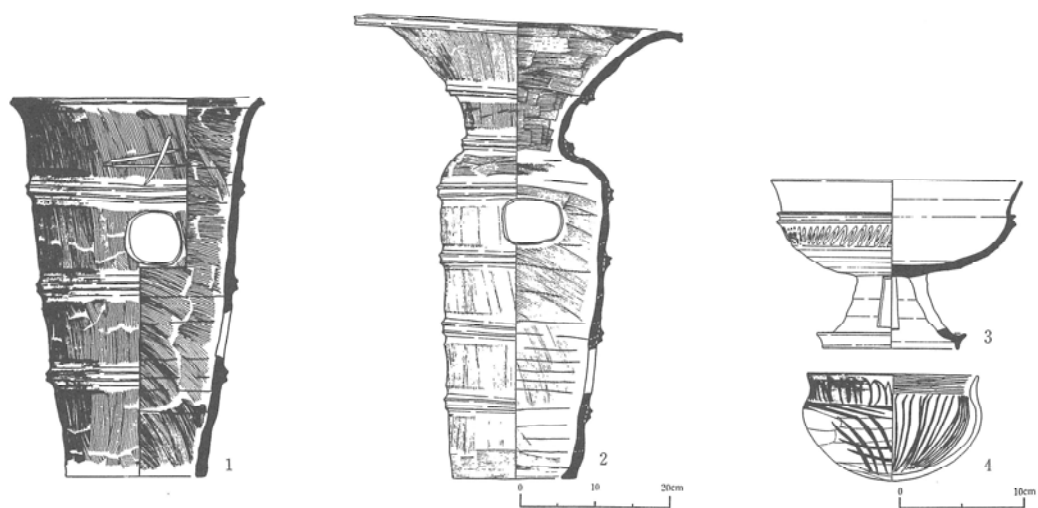
- 1) 円筒埴輪はいずれも小工程を繰り返す製作方法によっており、一挙巻き上げに伴う底部調整は見られない。
- 2) 外面調整は大型の朝顔形埴輪の一部（朝顔形埴輪2b類）に2次調整B種ヨコハケが認められる以外、すべて1次調整タテハケのみである。
- 3) 焼成は形象埴輪も含む全てが窖窯焼成である。
- 4) 凸帯はいずれも突出度の高いM字形を呈するもので、退化していない。

以上の点から、川西宏幸氏の円筒埴輪編年に対比させると（川西宏幸：1978）、一部にIV期の段階のものを含むが、ほとんどがV期の段階に相当するものである。底部調整を欠くが、これは東日本のV期の段階の埴輪に多く見られる現象であり、特に問題とはならない。

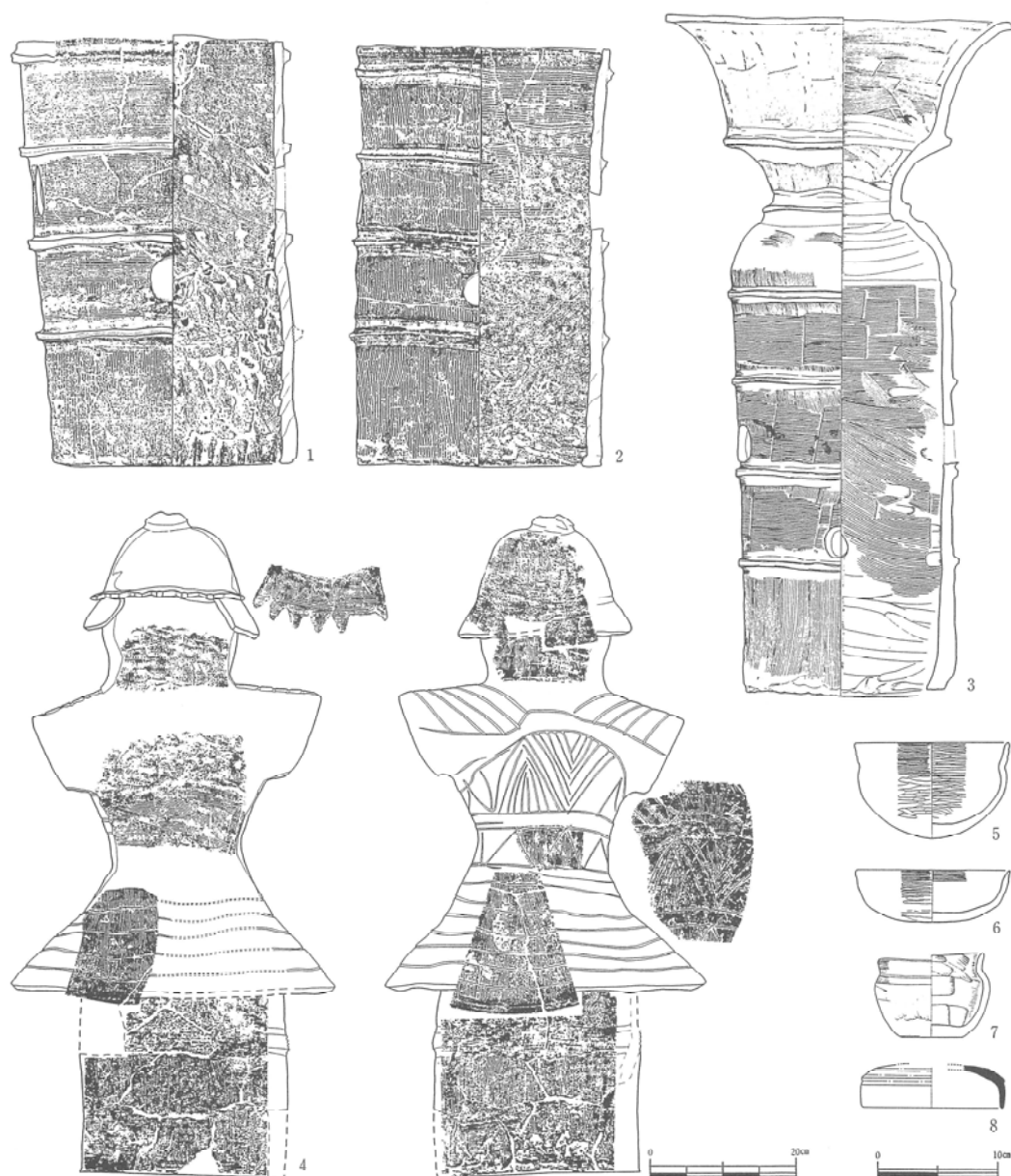
東北地方で当該期の埴輪に他の遺物が伴って出土している古墳としては、宮城県仙台市裏町古墳、福島県泉崎村原山1号墳、福島県本宮町天王壇古墳があげられる。裏町古墳では円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに須恵器樽形鉢・台付壺・器台が出土している（第106図、伊東信雄他：1974、結城慎一・藤沢敦：1987）。円筒埴輪・朝顔形埴輪では、半円形スカシ孔を有するA群（第106図1～5）の一部に2次調整B種ヨコハケが存在する。円形スカシ孔をあけるB群の円筒埴輪・朝顔形埴輪（同6～11）には、2次調整は全く認められず、全て1次調整タテハケのみである。須恵器は、その中に生焼けのものを含むことから在地製品の可能性があり、厳密な時間的併行関係については問題が残るが、ほぼ陶邑編年TK208型式の段階に相当する。原山1号墳



裏町古墳



原山1号墳



第107図 福島県天王壇古墳出土遺物

では、円筒埴輪には2次調整は見られず、全て1次調整タテハケのみである(第106図、鈴木啓・辻秀人他：1982)。朝顔形埴輪には、最下段の底面付近の外面に横方向のハケメが施されるが、これは変形を部分的に整えるものと考えられ、一般的な2次調整とは認め難い。ここでは須恵器無蓋高坏と土師器坏が出土しており、前者は陶邑編年TK23型式の段階に相当するものである。後者は佐平林式のもので、須恵器ではTK23型式からTK47型式ごろに相当するものと考えられる。天王壇古墳では、円筒埴輪・朝顔形埴輪ともに、ほとんどが2次調整B種ヨコハケ

を施しているが、2次調整を省略し1次調整タテハケのみのものがわずかに存在する（山崎義夫・大河内光夫：1984）。周溝底面から土師器が3点出土しており、これらは引田式に属すると考えられる。周溝の確認面ではあるが、須恵器坏蓋が出土しており、これについては東海地方の東山48号窯との共通性が指摘されており、陶邑編年ではON46号窯の段階に比定されている。いまだ少ない例であるが、以上の例からは、東北地方にあってもTK208型式からTK23型式の間で、2次調整のヨコハケはおおむね姿を消していくものと考えられる。このことは、埼玉県内での共伴する土師器・須恵器の検討から、TK208～TK23型式の間に2次調整のヨコハケが消滅していくという意見や（坂本和俊：1982）、栃木県でもタテハケのみの円筒埴輪で構成される小山市宮内2号墳で、TK208型式の須恵器大型甕が伴っていることなど（石川均他：1985、今津節生他：1988）、関東地方での様相と基本的に共通するものである。したがって菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪からは、TK208型式の時期を上限とすることができ、かつV期の段階の中でも、古い特徴を有していると考えられる。

一方、菅沢2号墳では器財埴輪を中心とする、豊富な形象埴輪が出土している。形象埴輪の中でも器財埴輪については近年研究が進展し、いくつかの変遷案も示されてきている（高橋克壽：1988、田中秀和：1988、松本武彦：1990）。ここでは、器財埴輪全般にわたって、その変遷を検討している高橋氏の編年に基づいて検討することとする。

鞆形埴輪は箱形の矢筒部の周囲に背板を有し、背後に半円筒形の支えが付く点から、高橋氏の一類に相当し、やじりの表現が直接背板に刻まれるという点から一類の中でも3式に該当する。ただし高橋分類の一類は、矢筒部と背後の半円筒形の支えを同時に筒状に製作し、その後鰭状の背板を付けるのに対し、本古墳例では円筒部に鰭状の背板を付け盾形埴輪のように製作した後に矢筒部を付けるという違いがあり、類例が無い。しかし、関東地方を中心に分布する奴風形の二類とは明確に異なるため、一類3式に含まれるものと考えておきたい。盾形埴輪は盾面がII字形の区画によって分割されるもので、二類に相当する。甲冑形埴輪は冑から草摺までの甲冑一式を表し各部が連続して成形されたもので、二類に相当する。衣蓋形埴輪は笠部の端部と受け部の部分が残っておらず、明確ではない。ただし残存している破片からは肋木は付かないと考えられ、二類、もしくは三類になるものと思われる。以上の器財埴輪の組合せからは高橋氏の器財埴輪編年の第四期に相当する。菅沢2号墳では、上記の器財埴輪以外にも家形埴輪、馬形埴輪が存在しているが、これらは高橋編年の第四期に存在しているものである。また菅沢2号墳では、女性の人物埴輪の可能性のあるものが出土しているが、人物埴輪の中でも巫女を表したと考えられるものは、大阪府大山古墳（仁徳陵古墳）の例のように、早くに出現するものと思われ、福島県天王壇古墳では甲冑形埴輪と女性の人物埴輪が出土している。以上見てきたように、菅沢2号墳の形象埴輪は、この高橋編年の第四期の器財埴輪の主要なもの

が全てそろっており、その構成は畿内を中心とする西日本のものと共通している。

この高橋編年第四期に位置づけられている大阪府蕃上山古墳では、甲冑形埴輪に伴い多様な人物埴輪が出現し、第五期にいたると、一類の靱形埴輪と二類の甲冑形埴輪は消滅し、器財埴輪の構成が大きく変わるとされている。そしてそれに伴い、多様な人物埴輪を中心とするものに形象埴輪の内容が一変する。したがって、菅沢2号墳の埴輪は、武人などの多様な人物埴輪群が出現する以前のものと考えられる。

この大阪府蕃上山古墳では、甲冑形埴輪とともに多様な人物埴輪が出土しており（西谷正：1965、野上丈助：1982）器財埴輪中心の形象埴輪から、人物埴輪中心の形象埴輪へと移り変わっていく初期のものと考えられる。蕃上山古墳の円筒埴輪は、古市古墳群の円筒埴輪の検討から、IV期からV期にかけての時期に位置づけられており（川村紀子：1982）、2次調整を省略した最も早い段階のものと考えられる。関東地方では、埼玉県 of 埼玉稲荷山古墳が人物埴輪の初期の例と考えられ、ここではTK23型式、あるいはTK23からTK47型式にかけてのものと考えられる須恵器が出土している。東北地方でも、福島県原山1号墳ではTK23型式の時期に、既に多様な人物埴輪群が出現している。また先に見たように円筒埴輪の変化が他地域と並行すると考えられることから、東北地方でも器財中心の形象埴輪から人物埴輪群が中心の形象埴輪への変化も遅れることは無いものと考えられる。したがって、菅沢2号墳の形象埴輪の内容からは、TK23型式の時期を下限とすることができよう。

先に見た円筒埴輪の検討と合わせて、菅沢2号墳の埴輪からみた築造年代は、陶邑編年TK208型式からTK23型式にかけての時期に限定されるものと考えられる。実年代の比定に関しては、近年多くの議論があるが、辛亥年銘の鉄剣を出土した埼玉稲荷山古墳の礫礫出土遺物がMT15型式の時期のものとする、白石太一郎氏の年代観を妥当と考え、須恵器の出現を5世紀初頭としたい（白石太一郎：1985）。よって、菅沢2号墳の築造年代は、5世紀の中葉から後葉にかけての年代が考えられる。

第3節 菅沢2号墳出土埴輪の系譜

菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪はその形態の上で、顕著な特徴を持つ。円筒埴輪は、2類としたごく少数の例外を除けば、その他のものは全て、ほとんど開かない円柱状の形態を示し、口唇部から5cm前後のところに凸帯を持ち、その直上から大きく開いて口唇に至る。朝顔形埴輪も体部は円柱状で、肩部に間隔が狭い2状の凸帯をめぐらす。円筒埴輪・朝顔形埴輪ともに、法量の点では大小あるが、いずれにおいてもこの形態上の原則は守られている。

菅沢2号墳の埴輪の類例は、現状では東北地方では発見されていない。山形県で埴輪の出土が報告されている古墳は、以下の7基である。